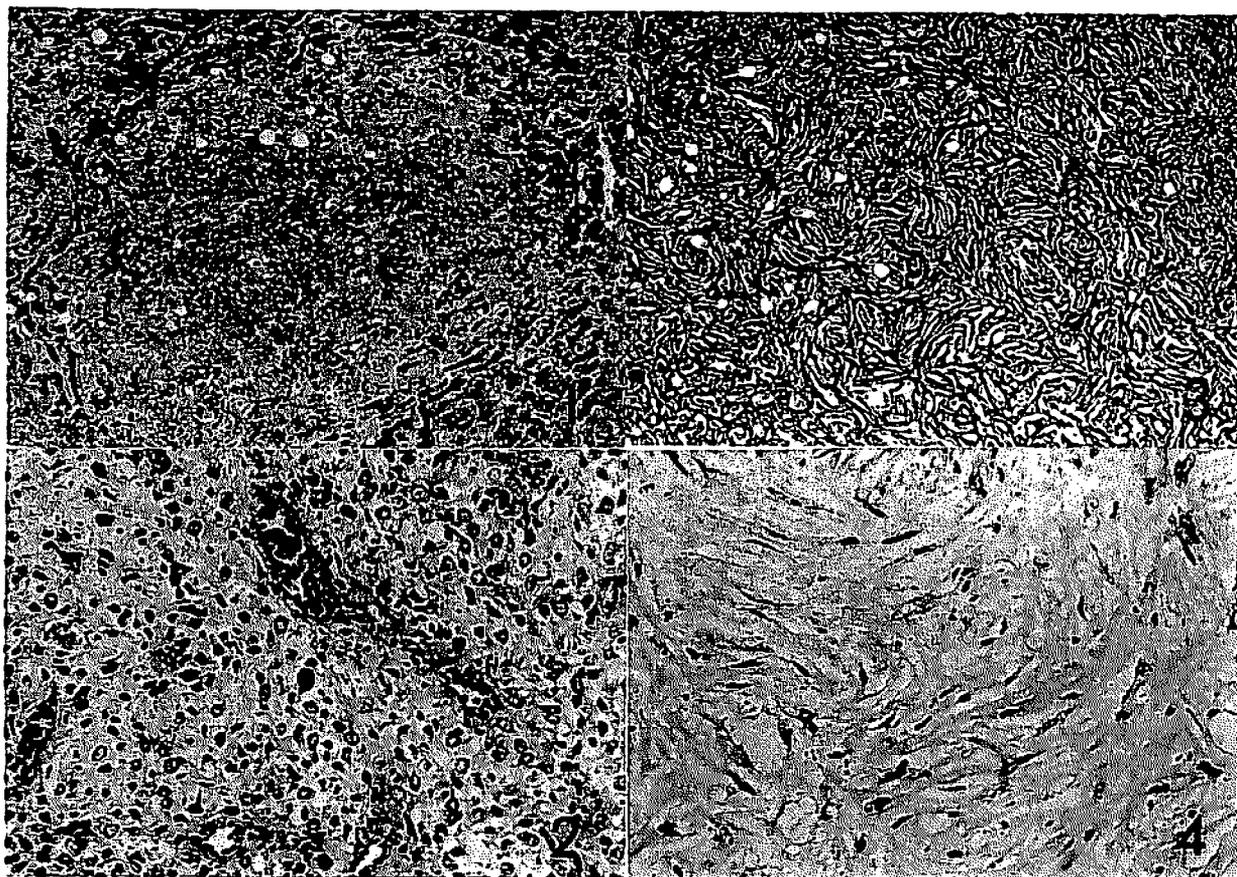


# イヌの肝臓腫瘍

日本大学農獣医学部獣医病理学教室出題 第28回獣医病理学研修会提出標本No.487



動物：イヌ，マルチーズ，14歳，雄。

臨床：昭和62年5月に腹部膨満を主訴として本学家畜病院に来院し，X線検査で腹部中央部に9×7cm大の陰影を認めた。血液所見はRBC477万/mm<sup>3</sup>，WBC15,900/mm<sup>3</sup>，PCV37%，BUN17mg/dlであった。試験的開腹を行い，肝臓に多数の腫瘤と大小拳大の嚢胞を認めた。閉腹後はリンゲル等の点滴を行ったが，6月1日に斃死した。

肉眼的所見：肝臓の内臓面に大きな腫瘍塊（剖面で6×4cm大）が形成され，また横隔膜面の表面及び剖面には1.5mm～2cm大の大小多数の灰白色結節状腫瘤が認められた。これらの腫瘤は中等度の硬さを有し，充実性であり，大型腫瘤は壊死及び出血を伴っていた。また剖面で粘液産生を呈する部分も認められた。さらに拳大の嚢胞もみられ，内部には血様漿液が貯溜していた。

組織学的所見：大型類円形ないし長円形で明調な核を持ち，細胞質は弱好酸性で乏しい腫瘍細胞の結節状増殖（写真1，HE染色，×100），多核巨細胞や空胞状の細胞質を持つ偽脂肪芽細胞に似た細胞の出現を伴う多角形の組織球様細胞の増殖（写真2，HE染色，×200），線維芽細胞様の紡錘形細胞の束状増殖及び少量から豊富な膠原線維と共にstoriform patternを示す増殖像（写真3，

渡辺鍍銀法，×100），さらに多量のアルシアンブルー陽性の粘液基質に富み，紡錘形及び多角形の細胞が疎に分布し，粘液腫状を呈する部位（写真4，HE染色，×200）も多く認められるなど，多彩な組織像を呈した。脂肪染色では，腫瘍細胞内に脂肪滴はほとんどみられなかった。なお，腫瘍細胞の核分裂像は部位によって少数から多数認められた。

電子顕微鏡的所見：多様な形態を示す細胞が認められた。すなわち，大型類円形で，ヘテロクロマチンに乏しく，核小体が大型明瞭な核を持ち，細胞質内には拡張した粗面小胞体を始め，多数のミトコンドリア，ゴルジ装置など細胞小器官が種々の程度に発達した線維芽細胞様細胞及び細胞質内に細線維のみられる筋線維芽細胞様細胞，ライソゾーム様顆粒，脂肪滴及び中等度電子密度の粘液様顆粒を持つ多形性の著しい組織球様細胞などが観察された。間質には種々の量の膠原線維や粘液様物質が認められた。

診断：悪性線維性組織球腫（MFH）

MFHは構成細胞と組織形態から，通常型，粘液型，黄色肉芽腫型，及び巨細胞型の4型に大別されている。本例は粘液腫状を呈する部位が多いことから，粘液型MFHに相当すると思われる。